

— 平成 28 年 度 —

中学入学試験問題

— 国 語 —

《 解 答 時 間 : 6 0 分 》

《 配 点 : 1 5 0 点 満 点 》

— 注 意 —

1. 問題は試験開始の合図^{あいず}があるまで開かないこと。
2. 問題用紙のページ数は、表紙を除いて16ページ、解答用紙は1枚である。不足している場合は、ただちに申し出ること。
3. 解答はすべて、問題の番号と解答用紙の番号が一致^{いっち}するように、解答用紙の解答らん^{らん}に記入すること。所定のらん以外の解答や、不明りょうな書き方をした解答は採点しない。(※印のらんには記入しないこと)
4. 開始の合図があったら、まず解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。

1

次の文章を読んで、あとの(1)～(10)の問いに答えなさい。

① フィの客というのは、あまりなかった。たいていは何日か前から知らされていた。その連絡はどうやってとられていたかというところ、たいていの場合、郵便である。何日の何時、こういう用件で伺いたいが如何なものだろうか。わざわざ御足労いただいて恐縮だが、御来駕をお待ちする。これが行ったり来たりするのだから面倒なことではあるが、間違いがなかった。約束の時間が近づくと、母は少しの普段着に着替え、お客さま用のお茶菓子を確かめ、その時間になっても客が現れないと、状差しの葉書を取り出してみる。その方が早いし、無駄も省ける。そもそも、わざわざ出向いて顔を合わせる必要からしてない。けれど、昭和のはじめには、一般の家庭に電話というものがなかった。阿佐ヶ谷の私の家の近所を思い出してみても、電話があったのは三軒先の歯医者さんの家だけだった。緊急の用は電報である。あのころ、客が多かったというのは、ほとんど、電話がなかったせいである。

② 手紙では意を尽くせない。③ 相手の気持ちを忖度しながら、遠慮がちに言ったからには先方の返事を待たなくてはいけない。返事がきて、とりつく島ができたから、ようやく肝腎な話に入る。そんなやりとりをしていたら、一年かかるから相手の家を訪ねるのである。用があれば、とにかく顔を合わせるとするのが当時の原則だった。訪ねる方も、迎える方も着替えなくてはならない。お土産も要る。お世辞も要る。けれど、いまみたいに電話で済ませたときの頼りなさがない。⑤ 顔を見て納得した気持ち良さが電話にはない。約束だって、目と目が合えばもっと確かなものに思える。子供たちだって、人を迎える行儀を自然のうちに覚えたと、挨拶もだんだん上手になった。寝そべって話したって相手にはわからない電話ではできない教育である。

⑥ 前触れの手紙がくる。それに応じる。そしてお客さまがやってくる。この何日かの期間というのも、なかなか良かったのではなからうか。迎える準備の中には気持ちの準備もある。その件について、その日まで、何かにつけていろいろ考える。思い立ってすぐに番号を回す電話より、訪ねる方も迎える方も、誠実な気がするのである。お互いの顔を見れば、言葉にしなくてもわかることもある。その件が、その場で解決しなくても、余韻の中で許し合うこともある。⑥ いまにテレビ電話ができたっておなじことである。顔が見えればいいというものではないのだ。わざわざ足を運んだということ、まず誠意のはじまりである。他に用がないわけでもないのに、その時間を空け

て待っているのが、それに対する答えである。座敷で向かい合っていると、縁側から気持ちのいい風が入ってくる。その風をいっしょに快く感じるから、ふとわかり合うことだってある。折悪しく雨が降ってきて、立ちかけた客がまた腰を下ろす。それから後の、場つなぎの世間話で笑い合ったのが後になって良かったということだってある。電話では風が吹かない。雨も降らない。

⑧ 母に連れられてお客にいくこともあった。学校へ上がる前のことである。往きの電車の中で、いままでも何度も言い聞かされた行儀心得が繰り返される。⑨ それによってどれほど行儀が変わるわけでもないのに、今日の先様がどんなに私たちの家にとつて大切かを説明される。家を出る前に十分点検したはずなのに、衿を直し、洋服の背中のごみを払い、髪を撫でつける。電車を降りてからもそれが繰り返され、いよいよ相手の家に着く。通される部屋は、たいてい私の家の座敷や応接間よりも上等に見えた。あれは、どうしてなのだろう。立派なお邸や、目上の人のお宅ばかり訪ねていたわけではないだろうに、⑩ チョウドヒンにしても床の間の置物にしても、なんだか高価なものばかりが並んでいるように思えるのだった。話の中身は何にも聞いていない。二度勧められたら食べてもいいことになっているお菓子を食べ、床の間の掛け軸ののたかった字を眺め、首をめぐらせて庭の広さを確かめたら、もうすることがない。足を崩したくなる。欠伸が出そうになる。すると母が、あちらの家の人に気づかれないように、口の形だけで私を叱る。しかし、四、五歳の子供にとつて、かしこまって大人しくしているのは、一時間が限界である。私は、わざとらしく溜息をついてみせる。⑪ それを潮時に母が座布団から下りる。ほどほどの引き止めを、ほどほどに遠慮して、その家を辞す。戸外はいい天気である。角を曲がって、見送りの奥さんの姿が見えなくなつて、私は肩の力を抜く。⑫ 小さな解放感がなんとも気持ちがいい。振り返ると、母もおなじほつとした顔をしていた。

(久世光彦『家の匂い町の音——むかし卓袱台があったころ』)

(1) ——— 線①⑤⑩のカタカナを漢字に改めなさい。

(2) にあてはまることばを文章中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

- (3) この文章には次の一文がぬけています。どこに入れるのがふさわしいですか。その直前の五字を答えなさい。(、。は字数に数えます)

いまなら、すべて電話で片付くことである。

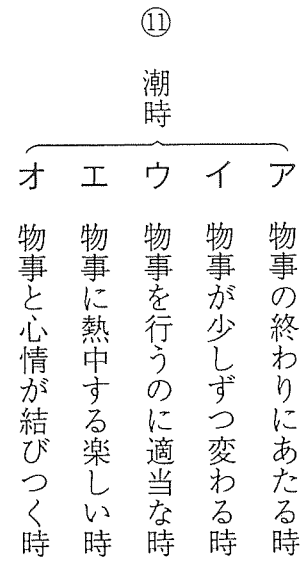
- (4) —線②「手紙」とありますが、手紙の書き方について説明した次の文の「Ⅰ」。「Ⅱ」にあてはまることばをそれぞれ漢字で書きなさい。

手紙を書く場合、通常頭語と呼ばれることばではじまり結語と呼ばれることばでおわります。よく用いられる頭語と結語の組み合わせは、「拝啓^{はいけい}」と「Ⅰ」です。頭語のあと、時候の挨拶など前文を書きますが、前文を書かない時もあり、その場合、頭語と結語はそれぞれ「Ⅱ」と「草々」を使います。

- (5) —線③「相手の気持ちを付度しながら」④「とりつく島」⑪「潮時」のここでの意味としてふさわしいものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ③ 相手の気持ちを付度しながら
- | | |
|---|----------------|
| ア | 他人の気持ちを無視しながら |
| イ | 他人の気持ちを推察しながら |
| ウ | 他人の気持ちを表現しながら |
| エ | 他人の気持ちをかき乱しながら |
| オ | 他人の気持ちを熟考しながら |

- ④ とりつく島
- | | |
|---|---------------|
| ア | たよりにしてすがるべき所 |
| イ | 物事のさしつかえになる所 |
| ウ | 相手の弱みともいいうべき所 |
| エ | どうしようもなくいやな所 |
| オ | 物事が仕上がりつつある所 |



(6) — 線⑥「テレビ電話ができたっておなじことである」とありますが、これはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。(、。は字数に数えます)

(7) — 線⑦「電話では風が吹かない」とありますが、ここでいう「風が吹く」とはどういうことですか。これを説明した次の文の にあてはまることばを考えて十字程度で答えなさい。

気持ちのいい風によって ということ。

(8) — 線⑧「母に連れられてお客にいくこともあった」とありますが、それには何の意味があったと筆者は考えていますか。文章中から十字でぬき出して答えなさい。

(9) — 線⑨「それ」が指している部分を文章中からぬき出して、終わりの五字で答えなさい。(、。は字数に数えません)

(10) — 線⑫「小さな解放感」とありますが、このとき筆者は何から「解放」されたのですか。ふさわしいものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 舌先三寸
- イ 八方美人
- ウ 公平無私
- エ 半信半疑
- オ 品行方正

2

次の文章を読んで、あとの(1)～(8)の問いに答えなさい。

バレエの全国コンクールに出場した理佳子^{りかこ}は、技術力に^た長け、演目「眠れる森の美女」においても難しい技に挑戦し、そのすべてを成功させるなど完璧^{かんぺき}に「オーロラ姫^{ひめ}」を踊^{おど}りきつて満足していた。しかしその直後、会場で知り合いになったエマが理佳子と同じ「オーロラ姫」を踊り、技術的には劣^{おと}るものの、表現力において理佳子をはるかに上回る優雅な演技^{ゆうが}を見せた。

オーロラ姫の振り付けのひとつひとつに意味があることを頭ではわかってはいたが、はつきりと腑^ふに落ちた。いったい今まで、あたしは何を踊っていたのだろう。

全身に鳥肌^{とりはだ}が立ち、膝^{ひざ}ががくがくと震^{ふる}えた。あたしが目の当たり^まにしているのは、本物の、生まれながらのオーロラ姫なのだ。舞^{まい}がモスクワで感じた「奇跡^{きせき}みたいな人」というのは、こういうことだったのか。舞の言う通り、世界は広かったのだ。

ほんの数分前には満足していたはずの自分の踊りが、^① ☐る ☐る色褪^{いろあ}せていく。今できることをすべてやったということは、裏を返せば、今のあたしにはこれ以上できないということだった。

果然^{げんぜん}とするあたしの傍^{かたわ}らに、踊り終えたエマが走りこんできた。たいして呼吸も乱れず、一滴の汗^{あせ}もにじませていないように見える。あたしに気づくと、彼女は端正^{たんせい}な顔をくしゃくしゃにして笑って、あたしの手をぎゅっと握^{にぎ}って言った。

「You are amazing」

素晴らしいわ、トリプルなんて、私は本番でまわったことがないもの。その素直な言葉に、^② あたしはただ黙^{だま}りこくつて、力なく愛想笑^{あいさうわら}いするしかなかった。彼女の踊りをきちゃんと称賛^{しょうさん}するには、あたしの英語力は乏^{とほ}しすぎた。

「See you later」

楽屋のほうへ去っていく彼女の後ろ姿を見送っていると、いつの間にか隣^{となり}に来ていた先生がため息をついた。

「バレエをやるために生まれてきたって、ああいう子のことを言うのねえ。あれはずるだわよ」

そして、^③ 対抗心^{たいこうしん}と優越感^{ゆうえつかん}のいりまじった不敵な笑^えみを浮かべて続けた。

「最後だけでもトリプルにするかと思ったけど、全部ダブルじゃねえ。理佳ちゃんと

差がつきすぎちゃって、気の毒だったわ」

今度はあたしがため息をつく番だった。先生に軽く会釈をして、ひとりで楽屋へと急いだ。よかった。少なくともあたしは、^④気づくことができたのだ。彼女が持っていて、あたしが持っていないものに。あたしがこれから、いやでも向き合わなくてはならないものに。

大勢の出場者の衣裳やシューズ、メイク道具などごった返す楽屋で、クールダウンのストレッチをしながら審査発表を待った。まわりには、小学生の頃から一緒に一学年ずつ上がってきたコンクールの常連たちの顔がちらほら見える。自己顕示欲のぶつけ合いのようなおしゃべりが高まれば高まるほど、あたしはま^⑤☐ま^⑤☐無口になった。

ただ何となく続けているとか、親の言いなりでやっているとか、そんな理由では決してここまでは来られない。けれど、このなかに、高校生の部や、シニアの部に進む者が何人いるだろう。中学最終学年を迎えたあたしたちは、間違いなく岐路に立っている。

全員が才能にあふれているわけではない。全員がバレエ向きの体型に恵まれているわけでもない。全員が同じように努力家なわけでもない。どの子にもひとつかふたつはいいところがあり、同時に三つも四つも欠点や悩みを抱えている。ただひとつ共通しているのは、みんなどうしようもなくバレエが好きだということ。

「それでは、ジュニア第一部門・中学三年生女子の部の入賞者を発表いたします」

あらかじめ上位三十名までが番号で発表され、舞台上に集められた。うちのバレエスクールからはこの部門に三人出場していたが、結局残ったのはあたしひとりだった。あの未完成なオーロラ姫で三十位に入っただけでも幸運なのに、先生は客席のいちばん前に陣取って、あたしが六位までに入賞することを願っている。後ろのほうのさつきと同じ席には、お母さんも座っていた。

番号順に並んでいくと、エマがあたしの右隣に立った。目が合うと、内緒話をするようにあたしの耳元に顔を寄せた。

「ドキドキ」

日本語でそう言って、エマはちよっとおどけたように笑ってみせた。舞台で見ると妖精か天使のような感じがするけれど、そばで見るといくらか人間味が感じられる。

⑦

□る□るとよく動く瞳が、ちよつと舞に似ている。

「Me too.」

そう答えたものの、本当は不思議なほどドキドキしていなかった。どんな場面でも、何も期待しなければ、心はこんなに穏やかでいられるものなのか。表彰は六位から始まり、名前を呼ばれたキトリの女の子が嬉しそうに歩み出て賞状を受け取った。五位、四位はどちらもエスメラルダ、三位銅賞には黒鳥が、次々と選ばれた。あとは金賞と銀賞、二名を残すだけだ。

「ジュニア第一部門、二位銀賞は、一二九番、オーロラ姫一幕のヴァリエーション、エマ・ジョンソンさん」

あたしは思わず、えっと声を上げそうになった。エマは、自分の名前を聞いたとたん、両手で顔を覆って喜びをあらわにした。

「It's unbelievable.」

信じられないのはあたしも同じだった。彼女が二位？では金賞は誰が取るというのだろう。このなかに彼女以上の踊りをした者がいるとは思えない。

細く長い腕を伸ばしてトロフィーを受け取る姿を見ているうちに、彼女のうっとりするような身のこなしが鮮明に蘇る。エマはロイヤルバレエスクールでどんな生徒だったのだろう。きつと、形だけの優等生というのではなく、どこにいても常に彼女は彼女自身でいる。そんな特別の存在感を放っていたに違いない。

「Your number is called.」

せわしく右肩を叩かれて振り向くと、エマがまた早口であたしに何かまくし立てている。見まわすと、先生が眉を額の真ん中ぐらいいまで引き上げてあたしに身振りで合図を送っている。わけのわからないあたしを見て、審査委員長がや□や□といった顔で、マイクに向かって言った。

「ジュニア第一部門、一位金賞は、一二八番、オーロラ姫一幕のヴァリエーション、戸田理佳子さん」

あたしは耳を疑った。この結果は間違っている。立ち尽くしたまま、その場を動けない。すると、エマがくしゃくしゃの笑顔で言った。

「Congratulations.」

そして困惑するあたしに向けて大きな拍手をした。その拍手は出場者たちに伝わり、

審査員にも広がった。先生も立ち上がって大きな拍手をしている。^⑨お母さんはいつもの笑みを浮かべて控^{ひか}えめに手を叩いている。

あたしはふらふらと数歩前に出た。一位の賞状が読み上げられ、いちばん大きなトロフィーを受け取ると、その重みがあたしを現実^{もと}に引き戻した。たしかに点数ではあたしが彼女を上まわったのかもしれない。でも、あたしは誰にも勝ってなんかいないのだ。

「理佳ちゃん、やったね！」

表彰式が終わり、有^{うちょうてん}頂天の先生にハグをされる頃には、あたしはさらに冷静にこの結果を受け止めていた。

「理佳ちゃんはうちのバレエスクールの誇^{ほこ}りよ。あなたが来てくれて本当に嬉しいわ」

「ありがとうございます」

今はこれでいい。彼女に一步でも近づくためにも、あたしにはこの抑^{おさ}えきれない情熱を受けとめてくれる場所が必要なのだ。オーロラ姫だって、王子のキスが呪^{のろ}いを解き放つまで百年かかったのだ。あたしだってきつと、目覚める。

帰り支度^{じたく}を終えて楽屋口に出ると、お母さんが待っていた。薄着^{うすぎ}のあたしの肩にお母さんのあたたかい掌^{てのひら}が触れた。

「おめでとう、理佳子」

お母さんはすべてわかつているのだ。ただ黙^{もく}ってうなずいたあたしが何を考えているかを。今、あたしが感じている挫折^{ざせつ}と衝動^{しょうどう}を。

「これからどうする？」

その問いかけに、迷わず答えた。

「お母さん。あたし練習したい」

ゴールだと思った場所はいつもスタートだ。また一からやり直し。それがわかっただけでも、オーロラ姫を踊^{おど}ってよかった。

「そう言うんじゃないかと思った」

お母さんは急^⑩にうきうきした少女のような表情になって、バッグから一年間使いこまれてく^⑪□□^注になった手帳と時刻表を取り出した。

「今から戻れば センターレッスンの最後に間に合うでしょう。じゃあ食事は新幹線

のなかでいいわね。クリスマスイブだけど」

そう言ってお母さんはほがらかに笑った。すべてわかっているからこそ、お母さんはいつも変わらない笑顔でいる。あたしがバレエを続けることを最優先にすべてを^{せん}選^ひび、全力で支えてくれている。あたしだけでなく、お母さんも今を生きているのだ。

(梅田みか「眠れる森の美女」)

注 舞……理佳子の友人。ロシアでバレエの体験レッスンツアーに参加しており、同じレッスンを受ける他の生徒たちを「奇跡みたいな人たち」だと感じている。

キトリ・エスメラルダ・黒鳥……いずれもバレエ作品の中の役名。

ロイヤルバレエスクール……イギリスにある有名なバレエ学校。

センターレッスン……バーを使わず、フロアを中心で行うレッスン。

- (1) — 線①「るる」⑤「まま」⑦「るる」⑧「やや」⑪「くく」のを補って、それぞれことばを完成させなさい。

- (2) — 線②「あたしはただ黙りこくって、力なく愛想笑いするしかなかった」とありますが、このときの理佳子の気持ちの説明として、次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

- ア エマのほめことばが空々しく聞こえて、少なからずしらけている。
イ エマの元気のよさを見せつけられ、その強い感情に^{あつとう}圧倒されている。
ウ エマの踊りが素晴らしく、自分の踊りの魅力^{みりょく}のなさを痛感している。
エ エマの素直さの前で、順位を気にしていた自分が情けなくなっている。
オ エマの踊りを、うまく英語ではめられない自分を^は恥ずかしく思っている。

(3) ———線③「対抗心と優越感のいりまじった不敵な笑み」とありますが、このときの先生の気持ちの説明として、次のア・イの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 三回転のトリプルをすべて成功させた理佳子に敵^{かな}う相手などなく、絶対的な勝利を確信し安心する気持ち。

イ 表現力という点において理佳子の演技がエマよりも低く評価され、不公平な審査を腹立たしく思う気持ち。

ウ エマが反則とも言える踊りを取り入れていたため、それほどまでに勝ちにこだわる姿勢をさげすむ気持ち。

エ 優雅なエマの踊りを評価しつつも、技術面ではるかに優^{すぐ}れた演技を披露^{ひろう}した理佳子を誇らしく思う気持ち。

オ 完成されたエマの演技に圧倒され言葉も出ないが、どうしても負けを認めたくなくて強気にふるまう気持ち。

(4) ———線④「気づくことができた」とありますが、理佳子はどんなことに気づいたのですか。その内容がわかる部分を二十字以内でぬき出して答えなさい。(、。は字数に数えます)

(5) ———線⑥「体型」は「タイケイ」と読みますが、

Ⅰ 同じ読み方で漢字の異なることは他にもあります。次の文のカタカナを漢字に改めなさい。

体操のタイケイに整列する。

Ⅱ 次の1・2の(a)・(b)には、それぞれ同じ読み方で漢字の異なることばが入ります。それぞれ漢字で答えなさい。

1 { (a) 電車が通過する。
店内を一部 (b) する。

2 { これは (a) 価値のある品物だ。
(b) 転結を意識して文章を書く。

(6) —線⑨「お母さんはいつもの笑みを浮かべて控えめに手を叩いている」とありますが、お母さんが「控えめに手を叩いている」のはなぜだと考えられますか。三十字以内で答えなさい。(、。は字数に数えます)

(7) —線⑩「急にうきうきした少女のような表情」とありますが、このときのお母さんの気持ちの説明として、次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 理佳子が受賞を果たしたことでバレエスクールの先生にほめられ、抑えきれない情熱を受けとめる場所が確認できて、親子の未来の目標がついに失われなかったことに感動している。

イ 理佳子が長らく目標にしていた金賞をようやく受賞し、それを機にますますバレエに打ち込むと言ったのを耳にして、今までの苦労は無駄ではなかったと改めて喜びにひたっている。

ウ 理佳子が踊ったオーロラ姫の美しさを思い出し、この演目を選んだことに感慨を催すと共に、彼女のこの演技がますます洗練されてゆくことを生活の最優先にすることを誓っている。

エ 理佳子が受賞後もまたバレエの練習に向かうと聞いて、折りしもその日がクリスマスイブだったことに思い当たり、新たな出発にふさわしいめぐり合わせであったと大変面白がっている。

オ 理佳子が新たに一から出直すつもりで練習しようとするのを感じ取り、技術だけではないバレエを目指して、これからも充実した時間を一緒に過ごせることをとても楽しみにしている。

(8) 理佳子の、バレエに対する強い覚悟が感じ取れる部分を文章中から五十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。(、。は字数に数えます)

3

次の文章を読んで、あとの(1)～(9)の問いに答えなさい。

日本人は個性に乏しい^{とほ}と言われている。^①「右へならえ」「出る杭は打たれる」など、個性を否定する言い回しも多い。日本人は、欧米人^{おうべい}に比べて、その人自身のアイデンティティ、つまり、「自分」を確立することができていないのではないだろうか。

私がアメリカで長く暮らして実感したのは、日本人が国際社会で活躍^{かつやく}するためにもっとも必要なことは、アイデンティティを持つことだということだった。

確立された「自分」がないから、みんなが良いと思うものを良いと感じる傾向^{けいこう}が強い。人気のあるもの、有名なものに飛びつき、ブランドものを買いあさる心理^{しんり}がそのテンケイだろう。^②「人がどう思おうと私はこれが欲しい^ほ」となかなか思い切つて言えないのが、いまの日本人ではないだろうか。

しかし、アイデンティティを確立していない人間は、国際社会では「大人」としては認められない。^③海外で成功する日本人の多くが、同じ日本人から見ると个性的で型破りに見えるのはそのためだろう。

昔から言われていることだが、日本は資源が少なく、国土も狭い^{せま}。頼りになるのは、この国に暮らす人々の力だけだ。日本人の教育にかける情熱と、それに応えた人々のハングリー精神が戦後の日本の経済成長を支えてきたことは誰も^{だれ}が認めるはずだ。

しかし、いまや世界有数の経済大国になった日本にハングリー精神は失われてしまった。しかも、価値観は多様化し、時代の変化のスピードはますます速くなっている。がむしゃらに努力してきた大人たちは、「いま」に追いつくことで精一杯^{せいいつぱい}なうえ、子どもたちに未来を指し示す余裕^{よゆう}などない状況^{じょうきょう}だ。

しかし、日本のもっとも重要な「資源」が人間であるなら、未来を担^{にな}う子どもたちに対して投資をせずにどこに投資をするのだろうか。グローバリゼーションが進み、^④ITの発展により世界が狭くなつたいま、本当の意味での「国際化」が日本人に求められている。

私は先ほど、「日本人が国際社会で活躍するためにもっとも必要なことは、アイデンティティを持つことだ」と書いた。アイデンティティを確立し、自分の価値観にプライドを持つ人間を育てることが^⑤キウウムだろう。

そして、そのために美術館が果たすべき^⑥ヤクワリは大きいと私は思っている。

日本の教育はつねに正解を求めることを最大の目標に設定してきた。「問い」には

必ず「答え」がある。その「答え」へ最短距離でたどりつくことが「頭がいい」ことだとされてきた。しかし、その考え方はいま、本当に有効だろうか。

現実を見てみれば、「問い」はあっても唯一、正しい「答え」などないということがいやというほどわかる。しかし、学校では、「問い」があれば必ず「答え」があると教えている。これは大きな矛盾ではないだろうか。

そこで、美術館に目を移していただきたい。

美術館に展示してあるものに正解は一つもない。その作品をどう観るかはまったくの自由だ。

もちろん、その作品を制作したアーティストの意図は存在する。しかし、それは決してただ一つの正解ではない。作者も考えていなかったような見方や、読み方ができることが芸術作品の魅力なのだ。優れた作品は作者の意図を軽々と超えて、観客の心のなかで多様な気づきを生み出していく。多様な解釈ができることは、優れた美術作品の条件だと言ってもいい。

しかし、日本人は、この「答えがない」ことが苦手なのだ。「美術は難しい」「絵はわからない」という声をよく聞くのは、多くの日本人が美術や絵の見方に「正解」があると思っているからである。欧米ではこうした声は聞かれない。「美術は好きじゃない」が心のなかに自分だけの「美術館」を作ることができるような豊かな経験を与えたい。

(蓑豊「超〈集客力〉 革命―人気美術館が知っているお客の呼び方」)

(1) — 線②⑤⑥のカタカナを漢字に改めなさい。

(2) — 線①「右へならえ」は慣用句です。慣用句・ことわざについて、あとのI・IIの問いに答えなさい。

I 次の1～5の [A] [G] には「右」「左」「上」「下」のいずれかが入ります。それぞれに適当なものを答えなさい。

1 縁の [A] の力持ち

2 [B] と言えば [C]

3 [D] に出る者がいない

4 石の [E] にも三年

5 [F] には [G] がある

Ⅱ 次の（a）と（b）とにあてはまる漢字を考え、それぞれの漢字に共通する部分と（c）にあてはまる漢字とを組み合わせてできる漢字を答えなさい。

（例） 奈落の（a） （a）の「底」と（b）の「広」との共通部分は「广」で、（c）は「心」なので、答えは「応」。

1 弁慶の立ち（b）生敵は本能（c）にあり

2 勝てば（a）軍（b）の持ち腐れ一（c）の虫にも五分の魂

3 悪（b）身に付かず六日の菖蒲、（c）日の菊

4 良（a）は口に苦し（b）しき仲にも礼儀あり生き馬の（c）をぬく

(3) 線③「そのため」とありますが、これを具体的に説明した次の文の□にあてはまることばを、文章中からそれぞれ指定された字数でぬき出して答えなさい。（、。などは字数に数えます）

一般に日本人は個性に乏しいとされ、□²（九字）¹ことができていないが、海外で成功する日本人の多くは、□²（十一字）¹しているため。

(4) — 線④「IT」とありますが、これはどの語の略語ですか。次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア インターホン イ インターネット ウ インバーター
エ インフォメーションテクノロジー オ インフォームドコンセント

(5) — 線⑦「大きな矛盾」とありますが、筆者がこのようにいうのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。(、。などは字数に数えます)

(6) — 線⑧「アーティスト」とありますが、これは「芸術家」という意味です。次の1～4の意味として適当なものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

1 エコロジスト
2 ナチュラリスト
3 エコノミスト
4 スペシャリスト
ア 経済学者 イ 自然愛好家 ウ 環境保全運動家
エ 専門家 オ 利己主義者

(7) — 線⑨「軽々」とありますが、「々」は同じ漢字をくり返すときに用いられます。次のア～クのうち、「軽々」のように、くり返して読むときの音が変わるものをすべて選んで、記号で答えなさい。

ア 職を転々とする イ 広々とした会場 ウ 早々に切り上げる
エ 方々を探す オ 散々な目にあう カ 得々として語る
キ 久々に外に出る ク 数々の伝説

(8) — 線⑩「心のなかに自分だけの『美術館』を作ること」とありますが、これは具体的にどのようなことですか。四十字以内で説明しなさい。(、。などは字数に数えます)

(9) 筆者の意見と合わないものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 日本人はアイデンティティを確立していない人が多く、こういう人は国際社会では「大人」として認められず、存在感がない。

イ 日本の学校では、「問い」があれば必ず「答え」があると教えているが、こういう考え方は、欧米人には受け入れられにくい。

ウ 「美術は難しい」「絵はわからない」という日本人が多いのは、美術や絵の見方には様々な解釈が存在し、「正解」がないからである。

エ 現実には、「答え」のない「問い」というものもあるが、多様な解釈が可能なのに対しては苦手意識が強いのが日本人である。

オ 国際社会の中で活躍する日本人を育てるためには、自分なりのものの見方ができる「大人」を生み出せる美術館が有効だ。

受験番号
氏名

3 の解答らんは裏にあります。

(9)	(8)			(7)	(6)	(5)				(4)	(3)		(2)		(1)
					1						2	1	II	I	②
													1	A	
					2										
													2	B	
					3								3	C	
													4	D	
					4										
														E	
														F	
														G	

